

ミナンカバウ (西スマトラ) のムハマディヤ運動に関する一考察

利 光 正 文

はじめに

K.H.アフマド・ダフランにより1912年中部ジャワの古都ジョクジャカルタにおいて設立されたイスラム改革団体ムハマディヤ (Muhammadiyah) は、1914年オランダ植民地政庁によりジャワでの活動を認可され、21年にはジャワ以外の地外領でも認められた後、全国的な組織へと発展する。イスラム近代改革組織としてのムハマディヤは、近代社会への適合を目指すとともに、イスラムの初期の精神への回帰を志向する。ムハマディヤは支部を各地に広げ、イスラムの一大勢力となった。特に、1920年代後半より、組織はジャワからスマトラへと拡大、その勢力は一気に膨張する。1925年西スマトラのムハマディヤ・マニンジャウ支部が成立、翌年パダン・パンジャン (西スマトラ) にも支部が設立された。既に、これらの支部設立に関しては、『別府大学紀要』(2014年)において考察済みであるので、小稿では、1930年西スマトラのプキティンギ (フォルト・デ・コック) で開かれた第19回ムハマディヤ大会について検討するとともに、西スマトラのイスラム改革運動についても考察する。

1 ムハマディヤ大会について

ムハマディヤの歴史において、大会は重要な意味を持つ。会員にとって活動の総括の場であるとともに、ムハマディヤ運動の情報と広がり一般の住民に知ってもらえる機会でもある。そして、大会には多くのムハマディヤ会員が全国から参集するので、開催地が潤うことにもなる。ムハマディヤにとっての一大イベントであるばかりでなく、開催地にとっても一大行事なのである。ムハマディヤ大会の歴史を紐解いて見ると、1912年から1925年まで設立の地ジョクジャカルタで開かれ、それ以後はスラバヤ (26年)、プカロンガン (27年)、ジョクジャカルタ (28年)、スラバヤ (29年) とジャワの都市で開かれている。ムハマディヤの中央本部会長は、創立者アフマド・ダフランが1922年まで務め、翌23年ダフラン死亡後K.H.イブラヒムが2代目会長となった。1934年H.ヒシャムが第3代会長、37年K.H.M.マンスールが第4代会長となる。ムハマディヤの場合、中央本部役員は会長以下13名で、会員による選挙で選ばれ、無給である。役員はそれぞれ仕事を持っており、創立者アフマド・ダフランはバティック (ジャワ更紗) 商人であった。

所で、ムハマディヤが大会を開くにあたっては、開催地のムハマディヤ支部にとっては大きな負

担となる。大会準備委員会を設置し、その地域のムハマディヤ会員は総出で準備に奔走する。開催が決まってから約1年の準備期間があるけれども、大会を成功裏に終えるためには全力で臨まなければならない。特に、一番頭を痛めるのは、資金の問題である。ムハマディヤでは、会員（anggota）と支持者（simpatisan）の2種類があり、会員は定期的に会費を払い会員証を持つ者でその数はかぎられている。支持者は会費を払わないけれども定期的に寄付をし、不定期で行事（イベント）に参加する者である。これらの人々から寄付を募るだけでなく、ムハマディヤとは全く関係のない人々からも寄付を仰ぐ。次に、開催地の準備委員会が取り組む問題は、宿舍の確保である。何しろ数百人のムハマディヤ幹部が全国から集まり、その地のホテルやその他の宿泊施設に泊まるのであるから、宿舍の確保は大変である。幹部はその地のホテルに泊まるけれども、一般の会員達はムハマディヤ学校の校舎（教室）等で寝泊まりするか、それが出来なければ、テント住まいである。交通手段もまちまちで、車・バス・汽車・船、そして最近では飛行機も利用する。勿論、飛行機の利用は、幹部およびお金に余裕のある者に限られている。1995年バンダ・アチューで開催された大会では、私も、終了後飛行機で帰る中央本部の幹部の人々と同じ飛行機に乗り合わせた。

さて、スハルト大統領の時代、彼はイスラム勢力の取り込みを図ったので、ムハマディヤ大会の開会式に出席、閉会式には副大統領が出席した。なにしろ、ムハマディヤはナフダトゥル・ウラマに次ぐインドネシアで第二のイスラム組織であるので、ぞんざいには扱わなかった。

2 ミナンカバウ（西スマトラ）のムハマディヤ大会

前述の如く、1930年プキティンギで開かれた第19回ムハマディヤ大会は、ジャワ以外で開催される最初の試みであり、ムハマディヤの発展にとっては重要な意味を持っていた。なぜなら、オランダ領東インドにおける当時のイスラム勢力は、ジャワを拠点とするナフダトゥル・ウラマを除くと、ムハマディヤが唯一全国的な規模を有していた。そして、オランダの植民地支配の下にあって、植民地政庁の認可を受けていた最も大きな組織でもあった。支配者であるオランダ植民地政庁は、集会・結社の活動に関しては、厳しい監視の目を光らせ、集会の折りには、常にスパイを送り込んで監視を続けた。そのような状況下での大会開催であったので、慎重な配慮が求められた。

さて、大会開催にあたり、一つの悲しい出来事があった。それは、ムハマディヤ中央本部副会長の任にあったH. ファフルディンの急死である。ハジ・ファフルディンは、1889年に多くのムハマディヤ幹部の出身地ジョクジャカルタのカウマンで生まれた。アルフィアン（Alfian）の『Muhammadiyah』（1989年）によれば、彼の父ハジ・ハシムは下級貴族の出で、ウラマ（法学者）としても名が知れていた。幼少時より父にイスラムの手ほどきを受け、更にプサントレン（イスラム塾）で学んだ。即ち、幼い頃よりイスラムに慣れ親しんでいたわけである。ムハマディヤ会員となり、直ぐに頭角を現す。1920年代の半ばには中央本部委員となり、ミナンカバウに派遣され、ムハマディヤの宣伝活動に従事する。ミナンカバウでの共産党との戦いに明け暮れながら、運動の進

展に全身全霊を傾けた。恐らく、その全力投球が健康を蝕み、死へとつながったと思われる。ムハマディヤは若くて有能なリーダーを失ったわけである。しかし、この痛手を乗り越え、ムハマディヤ運動は更に前へと進む。

さて、ミナンカバウでのムハマディヤ大会参加者は、『覚書(Pringatan Congres Moehamadiah Minannkabau)』によれば、次の通りである。所在地(ジョクジャカルタ・中部ジャワ)15名、ジャワ32名、セレベス2名、スマトラ1名、大会開催地ミナンカバウ地域100名、マジュリス・タルジー(規約・法会議)32名、中央本部役員19名、その他来賓として植民地問題担当顧問官フリース博士(Dr. de Vries)、パダン地区原住民長官外3名、原住民郡長外5名、イスラム近代派のタワリブ学校20名、マスコミ関係22名、計364名であった。勿論、この数は大会関係者のみで、恐らく一般の参加者はこれをはるかに上回る数であっただろうと思われる。なぜなら、ムハマディヤの大会は、当地の人々にとっては一大イベントであり、ムハマディヤ運動について知らない人々にとっては、興味しんしんのできごとであったに違いないと判断されるからである。

更に、宿舎は中央本部の幹部が当地のホテル、一般の会員はムハマディヤ学校の教室等で寝泊まりした。開会式はその地の一番大きな場所、陸上競技場等で行われた。大会の会議は、翌日より開始されている。尚、大会に参加するに当たり、アイシヤの会員は、ミナンカバウのアダット(慣習法)にのっとり、夫あるいは兄弟の許しを得なければならなかった。しかし、ムハマディヤ会員達の粘り強い努力により、ミナンカバウにおいてムハマディヤは次第に市民権を得、その活動がミナンカバウの人々に理解されるようになって行った。

所で、支部大会は1930年3月14・15の両日、カンボン(村)カジャイのムハマディヤ標準学校(Standaard school)で開催された。ムハマディヤの記録では、開会式にはミナンカバウの人々を含め約10,000人近くの人々が参加したと言われている。まさに一大イベントであった。参加した主要幹部は、ムハマディヤ中央本部議長K.H.イブラヒム、同副議長H.ハディクスモ、同委員M.J.アニース、同委員K.H.M.マンスール、ムハマディヤ・ミナンカバウ支部長A.R.スタン・マンスール等であった。主催者側を代表し、A.R.スタン・マンスールが開会演説を行った。スタン・マンスールは、後年、ムハマディヤ・ミナンカバウ・コンスル(全権代理)を務め、更に、ムハマディヤ中央本部議長に就任する。まさに、ムハマディヤを代表するリーダーの一人となる。

さて、これまでのムハマディヤ運動はジャワが中心であったが、ジャワ以外の外領に進出する第一歩が、ミナンカバウであった。ミナンカバウは母系制とムラントウ(出稼ぎ)の伝統を持ち、多数の優秀な人物を輩出して来た。男性はミナンカバウ以外の地で生計を確立し、一人前の男となっていった。そして、出稼ぎから戻る時、外界からの情報をもたらし、常にミナンカバウ社会に活力を与えた。ミナンカバウはインドネシアにおける先進地であった。この会議において、ミナンカバウの独自性が浮き彫りとなるとともに、ムハマディヤ運動の普遍性も明確となった。ミナンカバウ大会において、ムハマディヤ運動とは何か、そしてミナンカバウでの運動の広がりの意味が、問いなおされた。

この支部会議でのもう一つの重要な点は、組織の問題であった。中部ジャワのジェクジャカルタから始まったムハマディヤ運動は、東部ジャワ・西部ジャワへと広がり、スマトラへと拡大した。ムハマディヤが支部（cabang）を広げ、准支部（ranting）も持つようになり、裾野を広げて行った。この会議において、組織力のさらなる強化が議論された。具体的には、ダエラ（地域）制とコンスル（全権代理）制の確立であった。各ダエラは、①ジョクジャカルタ、②ソロ、③スマラン、④マディウン、⑤スラバヤ、⑥パスルアン、⑦ブスキ、⑧マドゥラ、⑨プカロンガン、⑩バニユマス、⑪プリアンガン、⑫ジャカルタ、⑬ランブン、⑭ベンクーレン、⑮ミナンカバウ、⑯東海岸（pasisir timur）、⑰アチェ、⑱セレベス（スラウエシ）、⑲南ボルネオであった。そしてそれぞれのダエラには、コンスルとして①T.M.ハッサン（アチェ）、②H r. モハマッド・サイド（東海岸）、③A.R.スタン・マンズール（Mansur）（ミナンカバウ）、④H.ユヌス・ジャマルッディン（ベンクーレン）、⑤H.A.ダルディリ（バニユマス）、⑥S.チトゥロスワルノ（プカロンガン）、⑦A.カリム・ムティ（スマラン）、⑧M.ムリアディ・ジョヨマルトノ（サラ＝ソロ）、⑨ノトアミダルモ（マドゥラ）、⑩A.R.C.サリーム（パスルアン1932）、⑪K.H.アブドゥッラー（南スラウエシ）、⑫H.M.マンズール（スラバヤ）、⑬Z.アビディン・ジャンベック（ランブン・パレンバン）、⑭ハスブッラー（マドゥラ）、⑮スジョノ（ブスキ）、⑯トム・オリイ（北スラウエシ）、⑰M.ザムザム・アイディッド（南カリマンタン）、⑱M.アリディウイヨ（マディウン）が選任された。こうして、ダエラとコンスル制の確立により、ムハマディヤの組織はより強固なものとなった。

おわりに

これまで、ミナンカバウにおけるムハマディヤ運動の発展について考察してきた。ジャワ以外の地では、ミナンカバウで最初にムハマディヤの運動が根づき、やがて強固なムハマディヤの前進基地として運動を展開して行った。このことは、ムハマディヤの歴史において特筆すべきことで、ミナンカバウの進歩的な一面を示すことでもあろう。現在でも、ミナンカバウはジョクジャカルタとともにムハマディヤ運動の拠点の一つである。母系制社会やムランタウ（出稼ぎ）の伝統を有するミナンカバウ。ムハマディヤ運動はミナンカバウの伝統にうまく適合しながら、その勢力を伸張させてきた。インドネシアのイスラム社会を理解しようとする場合、イスラム近代派の動きを視野に入れながらムハマディヤ運動について考察する事が必要であろう。